

時と自然の関係について

岩手県立岩谷堂高等学校 2年 廣野 あおい

私は、時と自然は切り離せない関係であり、この関係を守り将来にも受け継いでいくことが大切だと考える。このように考えた理由は、次の二点である。

第一に、人間は自然から時の流れを感じることができるからである。具体的には、毎日同じ道を歩いても、気温、植物の様子、鳥や虫の鳴き声から四季を感じ、四季の移ろいにも気づくことができる。また、旬の食材を食べ、季節の花の香りを嗅ぐなど、人間は五感を駆使して四季を実感しているからである。

さらに、季節を表現する季語は、自然に由来するものである。「入学式」や「花火」など人間の営みによる行事に由来し、自然との関係が薄い言葉も季語にはあるという意見もあるだろう。しかし、これらの季語は明治時代以降の新しいものである。奈良時代以降に詠まれた和歌を見ると、人間が自然の移ろいを感じ、時の流れに思いを、馳せてきたことが窺われる。特に、江戸時代以降俳句が隆盛を迎え、季語が確立した経緯を辿れば、人間が自然から時の流れを感じてきたと考えられる。

第二に、気象現象や動物の名前から自然と時の関係が窺われる。晩秋から初冬にかけて降ったり止んだりする雨を平安時代の頃から「時雨」と書いてきた。中国の漢語に由来し、元々は草木が育つ頃に降る時節に合った雨という意味だと言われている。さらに、ホトトギスを「時鳥」と書くのは、初夏の決まった頃に鳴き、農耕時期を告げることに由来している。そして、明け方に東の空が明るくなることや雨が降っているときに雲が薄くなり明るくなることを「時あかり」と書く。このように、気象や動物に「時」を使う言葉が少なくない。その上、自然現象で時の流れを表す言葉もある。「星霜」は歳月を意味する言葉で、星が一年で天を一周し、霜が毎年降り積もることに由来している。一般的な「月日」も、月と太陽の周回が由来である。以上のように、時と自然は深い関係にあり、人間の日常生活で使われて現代まで続いていた。

ところが、今、地球温暖化により環境が変化し、時と自然の関係も変化している。日本の年平均気温は百年前と比較し、約1.4度上昇している。平均気温が1度上昇すると、海面上昇や熱帯低気圧の勢力が増して異常気象を伴い、自然現象を変容させる。つまり、従来のような時の流れを感じることは難しくなり、時の流れを感じて受け継いできた営みや行事を継承することも困難になる。具体的には、桜の開花には冬の寒さに晒されることが必須だが、暖冬になると開花ができなくなり、平安時代から文学に描かれた花見をすることも無くなるだろう。このように、自然を大切にすることは、時の流れを感じながら、伝統行事を大切にすることと表裏一体である。伝統行事を守るためにも、時と自然の関係を守り、将来に受け継いでいくことが重要である。そのために、地球温暖化に歯止めかけるよう人間の行動を見直す必要がある。